鎌倉の埋蔵文化財4

Buried Cultural Properties in Kamakura 4

平成10・11年度発掘調査の概要

平成13年3月
鎌倉市教育委員会

～はじめに～

私たちの暮らす鎌倉の地下には、埋蔵文化財といわれる遺構や遺物が当時の姿のまま今でもたくさん遺っています。これらの埋蔵文化財はさまざまな土木工事等の実施によって残念ながら現状保存をできないことが少なくありません。失われてしまう埋蔵文化財と現代の市民生活の調和をはかるために、現状保存の不可能な遺跡は発掘調査を実施して精密な記録化を図り、その様子を私たちが理解できるようにすると同時に将来へ伝え、活用してゆくこととしています。

鎌倉市教育委員会では発掘調査関係者のご協力をえながら本誌の発行をはじめ、文化財めぐりでの現地説明会、鎌倉駅地下道ギャラリーでのパネル写真展、遺跡調査・研究発表会などの事業を実施して発掘調査の成果を皆様にご紹介しています。『鎌倉の埋蔵文化財』4では平成10・11年度に発掘調査を実施した遺跡のなかから、代表的なものを選んでその概要をお知らせいたします。本誌をご覧になる皆様にも、発掘調査の現場から遺跡を舞台に当時を生きた人々の息使いが聞こえてくるのではないでしょうか。これからもさまざまなかたちで発掘調査の成果をお知らせするように努めてまいりたいと思います。

～目　次～

1．長谷小路周辺遺跡 …… 3
2．海蔵寺旧境内遺跡 …… 4
3．若宮大路周辺遺跡群 …… 6
4．杉本寺周辺遺跡 …… 8
5．政所跡 ……10
6．東勝寺跡 ……12
英文要旨 ……14

〈表紙写真の説明〉

若宮大路周辺遺跡群で発見された漆器の椀皿類。

～例　言～

◎本書には平成10・11年度に市内で実施された主な発掘調査の概要を掲載しました。

◎本書に掲載した調査概要は各調査担当者に執筆をお願いし、編集は鎌倉市教育委員会文化財課が担当しました。また写真等は当委員会保管のもののほか、発掘調査団保管のものを使用させていただきました。

◎本書の作成にあたり次の方のご協力をいただきました。深く感謝をいたたします。

菊川英政、汐見一夫、宗臺秀明、田代郁夫、田畑衣理、手塚直樹、野本賢二、馬淵和雄、山上玉恵、渡辺美佐子（五十音順・敬称略）

◎表紙題字は松尾右翠氏に揮毫をお願いしました。

1，長谷小路周辺遺跡 Site of Hasekōji Area

●弥生時代末から中世につづく墓地遺跡

下馬から長谷観音へと向かう由比ガ浜通りの南側一帯の砂丘上に広がる長谷小路周辺遺跡では、これまでに20箇所ほどの地点で発掘調査が行われています。これらの調査地点では弥生時代の竪穴住居跡や土器、古墳時代の墓地や奈良・平安時代の竪穴住居跡、それに中世の倉庫跡・骨細工や銅細工の工房跡などが発見されています。

平成10年に発掘調査を行った地点からもこれまでと同様に中世の生活跡が発見されていますが、特に注目される成果は中世の火葬を行った跡のほかに、奈良・平安時代の火葬跡と火葬墓、そして弥生時代末から古墳時代初めの時期に埋葬された８体の人骨の発見でした。

この地域の中世以前の地形は、それ以後とは異なり調査区の南半分が南東に向けて広がるＵ字型の浅い谷（砂丘後背地またはラグーン）のような状況であったようで、谷の内側からは８～10世紀の火葬跡と火葬骨を納骨した二つの火葬墓が発見されました。ひとつは泥岩を鑿でくりぬいた岩櫃の中に納骨され、もうひとつは土師器に納骨して須恵器の高台付坏で蓋をしたものでした。今後も近隣の発掘調査でこの時代の火葬墓が発見される可能性があります。

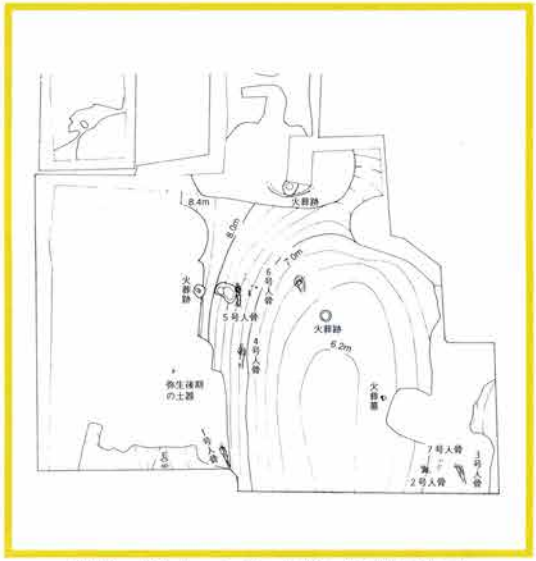
さらに下層の海に向かって緩やかに傾斜する地形であった弥生時代の終わりから古墳時代の初め頃の生活面からは、埋葬人骨が発見されました。８体の埋葬された人骨のうち、４体は内陸方向の北東に頭を置いて身体を伸ばしている伸展葬で、１体は海岸方向の南に頭を向けて身体を折り曲げている屈葬で葬られていました。多くの人骨がその頭を北東に向けていたことから、その方向にこれらの人々の生前の生活領域があったことが窺われます。死者の身体を折り曲げて葬る屈葬には、死者が再び起きあがることのないようにする葬り方だと言われています。そうしたことから考えるとこの人骨は死亡原因が尋常ではなかったのかもしれません。その他３体の人骨の埋葬形態は不明です。

専門家の鑑定によると、伸展葬人骨のうちの１体には多発性軟骨性外骨腫と診断される骨の発育異常のあることが指摘されています。このように発掘調査で出土した人骨を鑑定すると人々の病歴などを知ることもできます。病気を手がかりに、当時の日本列島に暮らした人々の生活の様子をさぐることも可能になります。

長谷小路周辺遺跡の周辺では、以前から中世に火葬の行われていたことが明らかにされていましたが、この地域での火葬の始まりが由比ヶ浜一帯が陸地になりはじめた弥生時代の終わり頃からすでに行われていたことが発掘調査の成果からよくわかります。

伸展葬の人骨
extended burial

屈葬の人骨
contracted burial



弥生時代末～平安時代の遺構全体図

●仮粧坂周辺における多量の木製品出土遺跡

海蔵寺旧境内遺跡は扇ガ谷のうち、源氏山から北西へと延びる丘陵の東側の梅ヶ谷と呼ばれる谷の内部に位置します。本調査地点の北側には臨済宗建長寺派の海蔵寺があります。この寺は応永元年（1394）に上杉氏定が鎌倉公方足利氏満の命を受けて創建したと伝えられ、開山は大覚禅師五世の孫という心昭空外といわれています。

鎌倉は三方を山で囲まれ、一方を海に面しているため、要害の地として最適であることから、治承二年（1180）に源頼朝が鎌倉に入る理由のひとつであったことはよく知られています。このため鎌倉と外の地域を結ぶために、丘陵を人為的に切り開いて道を通す必要があり、そのために作られた道が「切通」と呼ばれているものです。

七切通しと呼ばれる代表的な切り通しは、名越坂、亀ヶ谷坂、仮粧坂、大仏切通、巨福呂坂、朝夷奈切通、極楽寺坂の七つですが、本調査地点の南側には国指定史跡の仮粧坂があります。仮粧坂の地名の由来は、討ち取った平家の武将の首を化粧し実見したところなどの諸説があります。この仮粧坂口を越えれば、藤沢などから武蔵方面へ通じ、逆に鎌倉への道筋は武蔵大路につらなり、鎌倉街道上ノ道の鎌倉からの出入口としての重要な交通路であると同時に鎌倉を敵から守るための防御地点でもありました。これは元弘三年（1333）新田義貞の鎌倉攻めで大軍を仮粧坂に差し向けたことからも、戦略上いかに重要な場所であったかを物語っています。また『吾妻鏡』には鎌倉中に商売を営んでよいところのひとつとして「気和飛坂山上」があげられており、当時は人々で賑わったことでしょう。今回の発掘調査は狭小な面積にもかかわらず、13世紀中頃から14世紀後半にわたる３時期の生活面を確認することができました。特に木材の残りがよく、建物部材や木製品をはじめとする遺物が多く出土しています。これは山裾の谷戸に土砂が厚く堆積し，地下水が豊富で

２b面全景

２b面落込み遺物出土状況

２b面張出し部

２b面落込み

あったという調査地点の立地条件とともに、地下約３mまでの調査を実施することができたことによるものです。

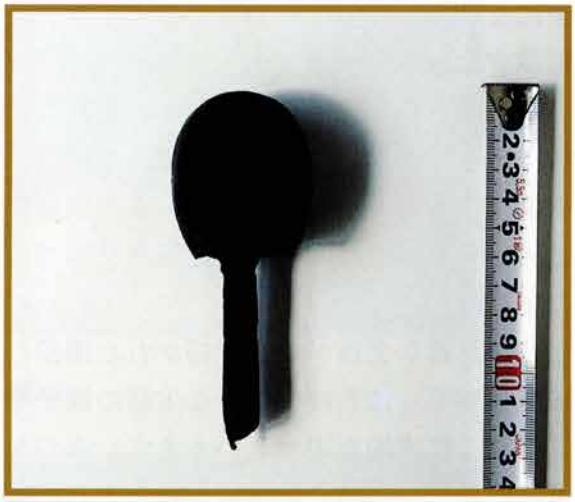
そこで今回は木製品が多量に出土した第２面の調査概要をご紹介します。第２面はさらに上層（２ａ面）と下層（２ｂ面）に分けられ、上層では青灰色粗砂の地形面に柱穴４口、礎板や杭、縦板等の建物部材を発見することができました。上層から約20cm掘り下げると下層の粗砂による地形面が広がり、調査区東側で高低差約30cmの落ち込みを確認し、落ち込みには横板と杭で土留めされた張り出し部が設けられていました。

下層の遺物の大多数はかわらけですが、その他を木製品が占めています。木製品の種類としては箸、折敷、下駄、草履芯、曲物などの生活用品や漆器の椀・皿も出土しています。漆器は高価なものという現代の感覚から、貴重品と考えられますが、鎌倉では非常にたくさんの漆器が出土しています。今回の調査でも無文のものから三巴文、植物文（草・竹・笹・菊・梅）などの文様が施されているものが出土しています。『一遍上人絵伝』をみると貧しい身なりの人が漆器の椀を使用しているように見える場面が多く描かれており、漆器は多くの人々が使用していた生活用品であったと考えられます。また他には形代や木偶が出土しています。形代は人、動物、武器などを模してそれに代わるべきものを作り、種々の呪術を行うための道具です。この遺跡で出土している鳥形はあの世とこの世をつなぐ役目や運搬などが考えられるものです。また木偶は顔面に目、鼻、口を線刻で、髭を黒色漆で表現しており、後世の文楽の人形のように着物を着せていたのかも知れません。かわらけや木製品の他にも鎌倉市内では出土があまりない五銖銭（初鋳年：隋581年）をはじめ、輪花型の瀬戸の入子、金属製品の毛抜き、金銅製品などが出土しています。

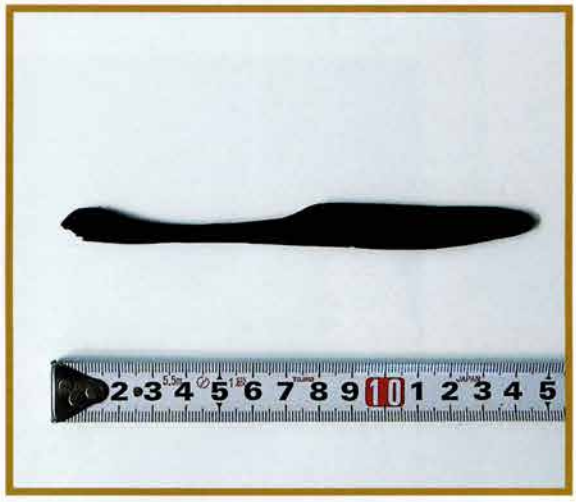
今回は本遺跡の第２面を中心にご紹介をしましたが、その他第１面では砂岩塊の石列、砂岩切石２個、柱穴13口、また第３面では青灰色粗砂の地形面に40～50cmの間隔で南北に延びる礎板列を確認することができました。どちらの面においても遺物の大半はかわらけが占めていました。

今回の発掘調査は、扇ガ谷地区の西半における初めての面的な調査となりましたが、多量の遺物が出土し大きな成果を得ることができました。

漆器の出土状況
lacquer ware



出土した木偶
carved wooden figurine



出土した鳥型
bird-shaped effigy used in purification rites as a substitute for a god or a person

3，若宮大路周辺遺跡群 Site of Wakamiyaōji Area

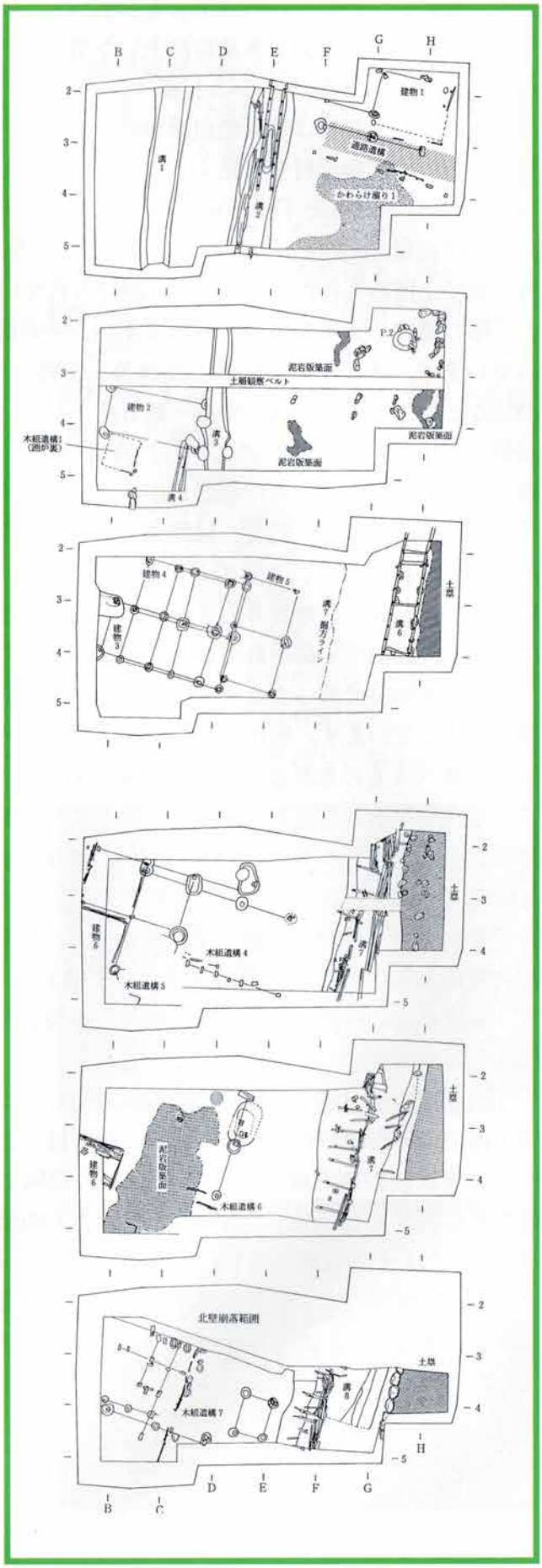
●たくさんの掘立柱建物跡や溝跡がみつかった市街地中心部の遺跡

若宮大路周辺遺跡群は、国指定史跡に指定されている若宮大路を中心に現在の市街地中心部の大半を含む地域を範囲としている遺跡です。平成10年に発掘調査を実施した地点はこの遺跡の北西部に位置しており、商店街として賑わう小町通りの西側にあたり、西側には扇川（おおぎがわ）が流れています。

発掘調査の結果、鎌倉時代の全般を通じて溝を中心とした町割りの変化やそれに伴う居住空間の変化が明かになりました。この地点は地下水位が高いため、発掘調査は湧水に悩まされながらの実施となりました。しかしながら、豊富な地下水は埋もれていた遺構や遺物にとっては恩恵となり、木組みの構造で作られた溝や掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）を構成する木材、また漆器や箸などをはじめとする様々な木製品が良好な状態で大量に見つかりました。

特に華麗な文様が朱漆で描かれた漆器の椀や皿（表紙写真参照）は当時の豊かな生活の様子を私たち伝えてくれる代表的な遺物といえます。みつかった遺構や遺物の様子から、この場所が武士もしくはある程度の財力をもった庶民の暮らしていた場所であったことがうかがわれます。

木組みの構造の溝跡
ditch built of wood



遺構変遷図

調査区全景
embeded-pillar building and ditch

かわらけ溜まり
burial pit in biscuit ware small dish

木組みの溝と土塁
ditch built of wood and earthen rampart

漆器（梅花文の皿）
lacquer ware

漆器（扇・流水文の皿）
lacquer ware

漆器（飛鶴文の椀）
lacquer ware

4，杉本寺周辺遺跡 Site of Sugimotoji-Temple Area

●道路跡と大量のかわらけが発見された遺跡

杉本寺周辺遺跡は、鶴岡八幡宮から東の朝夷奈切通方面に向かう六浦道（現在の県道金沢・鎌倉線）の南側に面し、杉本寺の向かい側にあたる場所にあります。この遺跡では平成２年にも発掘調査が実施され、鎌倉時代前期から南北朝時代にかけての掘立柱建物群、堀跡及び道路遺構などが発見されています。特に鎌倉時代前期の大規模な武家屋敷は有力な御家人の屋敷と考えられる重要な遺構であることから、調査後も建物の建設計画を変更するとともに、埋め戻して保存されることになりました。

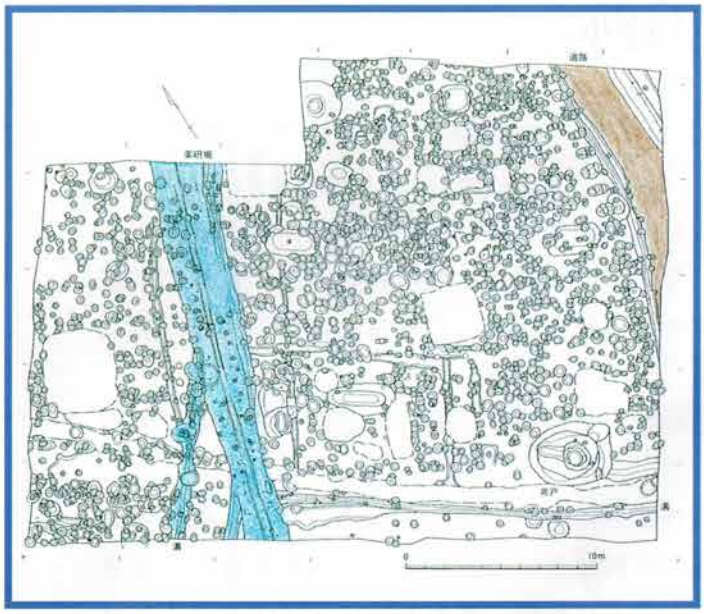
１次調査　３面　全景写真
posthole-type building,ditch and well

平成11年の発掘調査は、前回の調査でみつかった大規模な武家屋敷を保存する方針にそって進められ、上層にある鎌倉時代の後期以降の遺構に限定して実施されました。

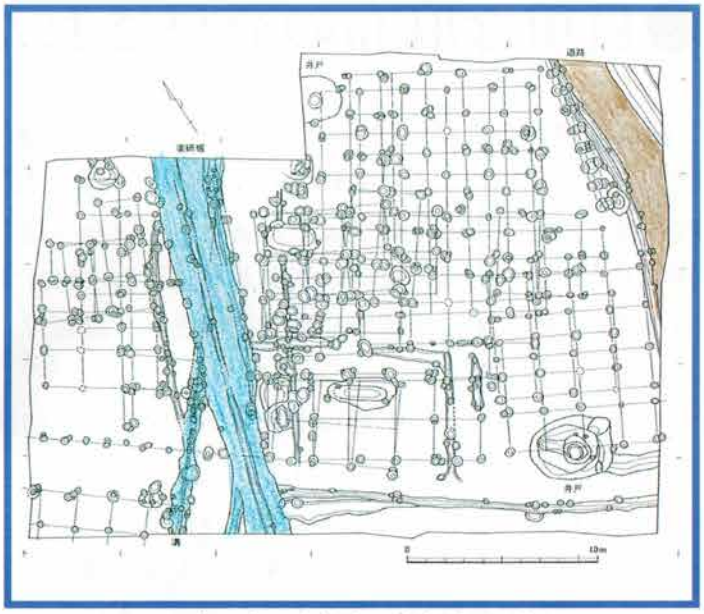
このため遺跡の下層にあたる鎌倉時代前期の遺構の発掘調査は実施していません。発掘調査の結果、鎌倉時代の後半から南北朝時代初め頃の遺構面上におびただしい量の「かわらけ」が捨てられた状況で発見されました。「かわらけ」は素焼きの土器で当時、清浄な使い捨ての食器として武家屋敷で行われる宴席などで大量に使用されていたものです。前回の調査で発見された道路遺構は、今回の発掘調査でもその続きの部分が発見されています。道路遺構は調査区のほぼ中央において、長さ約10ｍ、幅約５ｍの規模で南北方向の道路遺構として発見されました。市内の発掘調査ではこれまでにもいくつかの道路遺構がみつかっていますが、若宮大路に代表されるように大規模な道路遺構の場合、側溝を伴ったものがほとんどです。今回、発見された道路遺構には側溝が伴っていない点が特徴となっています。道路遺構は砕いた泥岩を敷き詰めて、現代の道路の舗装に相当するような造作を行っています。発見された道路遺構の軸線を延ばして、道路の行く先を推定してみると現在の犬掛坂の方向に真っ直ぐ向かっていることがわかります。この道路遺構は鎌倉時代中期（13世紀中頃）に作られたものと考えられます。

２次調査　かわらけの出土状況
"kawarake" (biscuit ware small dish)

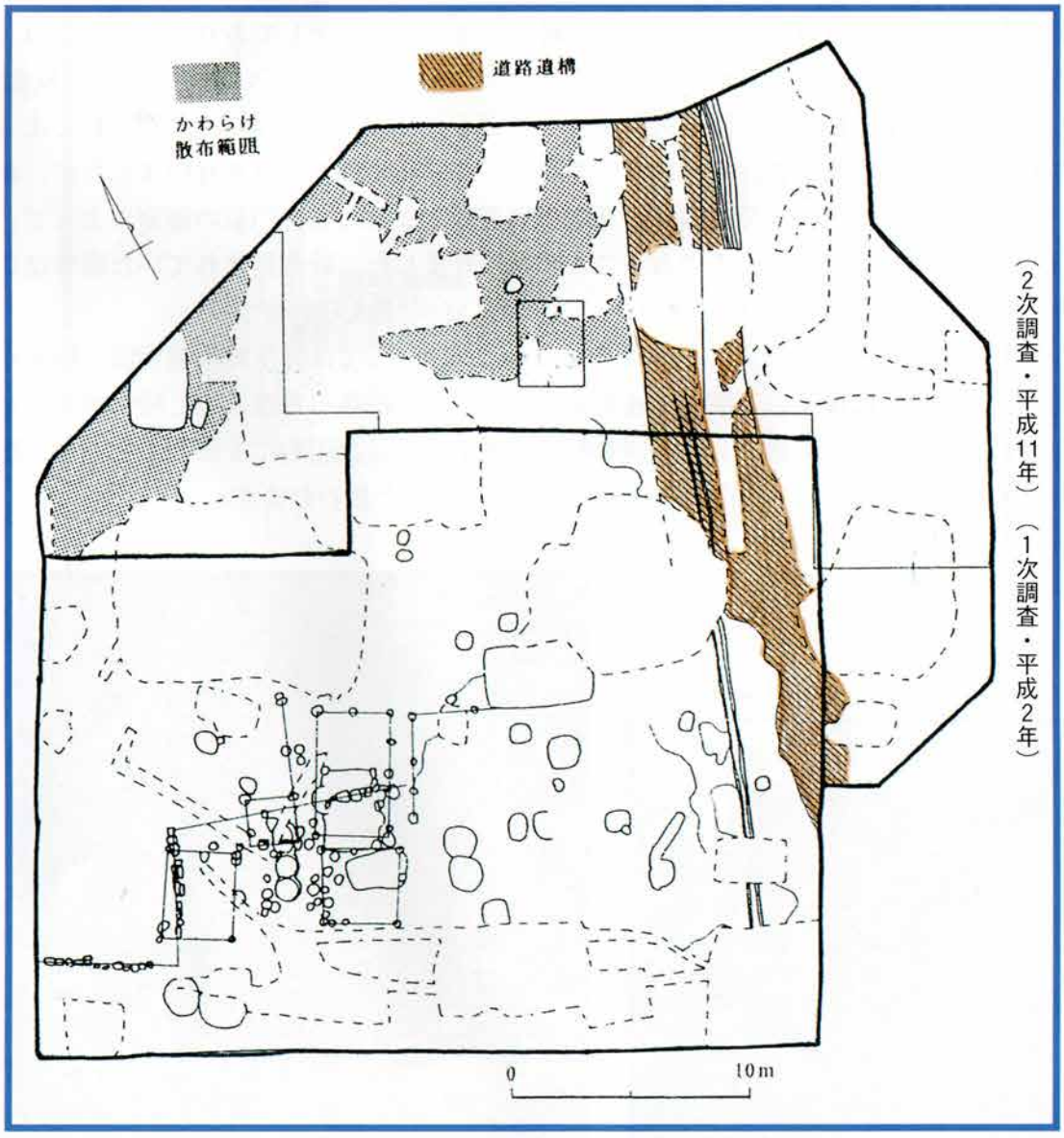
２次調査　全景写真



1次調査　遺構全体図



1次調査　建物跡と道路跡と堀跡
（概念図）



（2次調査・平成11年）（1次調査・平成2年）

調査区全体図（1次調査と2次調査の合成図）

5，政所跡　Site of Mandokoro

●貴重な麻布の発見された遺跡

鶴岡八幡宮の東隣、横浜国大附属小学校の南にあたる地域は、鎌倉幕府の政務機関で、『吾妻鏡』建暦三年（1213）５月２日の条にその存在が記されている政所があったところと推定されています。政所跡と推定される地域ではこれまでに６箇所の地点で発掘調査が行われており、政所跡の範囲の南側を限る土塁や側溝、東側の側溝が発見されています。今回の発掘調査は政所跡の範囲のなかで、鶴岡八幡宮に隣接する場所で初めて実施された調査で、政所跡の西側側溝と八幡宮との間の道路が発見されました。

今回の調査では上層より14世紀前半の第１面、13世紀中頃から14世紀初頭の第２面からそれぞれ中世の道路と側溝が発見されました。

山砂と粘土を何層にもわたって叩き締めた道路は、調査区の西方外にまで広がるために、幅員を確認できませんでしたが、道路と側溝は中世を通じてほぼ同位置にあって、地境の一貫性を推定できます。この道路の東路肩に設置された側溝を東に渡ると塀が南北に並び、それを境にしてより東方には井戸、ゴミ穴、柱穴が掘り込まれた屋敷地の一画が発見されました。これによって政所跡の東、南、西の地境が確認されたものと思います。図には政所跡の地域でこれまでに発見された道路と側溝、それに西隣の鶴岡八幡宮で発見されている中世の土塁跡などを合成して示してあります。現在の八幡宮と周辺の道路や地境と若干異なりますが、ほとんど中世の地割を今に残していることがわかります。

また今回の調査地点の第１面では、調査区の東外へ広がるゴミ穴から分厚く折り畳まれたようにして残っていた麻布が発見されました。丁寧に時間をかけてこの布の取り上げを行いましたが、かなり劣化し、すでに腐食してしまった部分も多く、発掘には苦労しました。専門家の鑑定によって、布は平織りの麻布で、墨染めされているものであることがわかりました。折り畳まれていた麻布はかなりの大きさであったと思われ、凶事に用いられた幔幕ではないかと考えられます。

縄文文化の終わり頃からすでに編まれた布はありますが織布としては弥生時代前期頃に麻布が確認されています。綿は古墳時代後半の文献に記述されていますが、綿布の普及は室町時代頃からといわれ、それまでは絹と麻が織物の主流でした。鎌倉時代の出土麻布は全国的にも初めてであり、墨染めされた布は中世前期の染織資料として貴重な研究資料になるものと思われます。

政所跡の西側溝
side gutter of "Mandokoro"

麻布の出土状況
hemp linen

政所跡調査区合成概念図

出土した麻布断片の拡大写真
hemp linen

●東勝寺跡で発見された礎石建物

東勝寺跡は鶴岡八幡宮の前面を東西にはしる横小路を八幡宮の社頭から東へ250ｍ程進んだ場所にある宝戒寺の東側背後にあたる葛西ヶ谷のなかに位置しています。宝戒寺は東勝寺で自刃した北条高時の菩提を弔うために後醍醐天皇が高時邸跡に建立したとされる寺院です。東勝寺跡は元弘３年（1333）５月22日、新田義貞等の鎌倉攻めにより、北条高時をはじめとする一門870余人が自刃した北条氏終焉の地としてよく知られています。往時の東勝寺は関東十刹のひとつで、東勝寺は山号を青龍山と号し、臨済宗と顕密兼修の寺院でした。開基である北条泰時が寿福寺の開山としても知られる高僧栄西の弟子である退行行勇を開山として招いて建立した寺院です。中世を代表する軍記物語『太平記』によれば、東勝寺が北条氏先祖代々の墳墓の地であることが記されています。この寺は元弘３年に焼亡し、その後何度かの復興、廃絶を繰り返し、最終的には元亀４年（1573）頃に廃寺となった伝えられています。

白磁梅月文碗
white porcelain

青磁双魚文鉢
celadon

東勝寺跡ではこれまでに４地点で発掘調査が実施されています。第１・２次調査では石畳の坂道や石塁状の石垣といった城郭的遺構が発見され、北条氏の家紋である三鱗文のついた瓦や舶載陶磁器などの遺物が出土しています。第３・４次調査では東勝寺の主要伽藍と思われる掘立柱建物が発見されました。こうした調査成果に基づき、平成10年に東勝寺跡は国指定史跡に指定されました。

今回の発掘調査は史跡東勝寺跡の指定地西側に隣接する場所で実施され、２時期の中世遺構を確認することができました。

上層にあたる14世紀中頃の遺構面では、土盛りと破砕泥岩による地業を施した基壇状の遺構が発見されました。この基壇状遺構の上面では柱穴列を１列発見するだけとなり、残念ながら具体的な礎石建物などの遺構を明らかにすることはできませんでしたが、地業面上に細かく砕いた貝殻混じりの砂を敷いている状態が確認されたことから、この遺構が景観を重視した建物であった可能性も推定されます。

下層にあたる13世紀末から14世紀前半の遺構面では、かわらけの細片が混入した焼土が部分的に破砕泥岩による地業面が確

褐釉壷
brown glaze jar

認され、２列の礎石列が発見されました。礎石列は伊豆石（安山岩）を用いた東西１間（約３尺３寸・100cm）、南北４間（約７尺・215cm）の規模で、さらに南北の礎石列は調査区の外側に延びることが予想されます。このような遺構の状況からは、この礎石列が礎石建物の縁束（えんづか）の部分か、あるいは回廊（かいろう）のような建物跡であることが推定され、東勝寺の伽藍全体を構成する建物の一部であったものと思われます。

出土遺物は非常に少なくかわらけが大半を占めていますが、碗の内側に梅、波、月、牡丹の模様を（よう）施した白磁椀（はくじわん）、２匹の魚の模様がある中国龍泉窯系（ちゅうごくりゅうせんせいけい）の青磁鉢（せいじはち）、肩の部分に４個の縦耳が付いた南宋から元の時代に作られた褐釉四耳壺（かつゆうしじこ）などの舶載陶磁器の出土が注目されます。

今後とも東勝寺跡の全容を明らかにしてゆくため、さまざまな機会を得てこの遺跡の発掘調査を継続してゆくことが望まれます。

礎石建物
building constructed on base stones

１面全景

２面全景

Excavated Cultural Properties in Kamakura 4

1. Site of Hasekōji Area

Site of Hasekōji Area extends on the sandhill, south part of Yuigahama Street running through Geba to Hasedera Temple. Latest excavation there in 1998 showed the site of crematory and two tombs including cremated bones of Nara-Heian Period and eight bodies of Yayoi to early Kofun Period. These tombs were found in the U figure shaped shallow valley with southeast direction, and one of them is a rock container and the other Haji pottery covered with Sue pottery. Eight bodies were found in the gentle slope toward the sea, and one of them was buried with the body bending.

2. Site of Old Kaizōji Temple Area

Site of old Kaizōji Temple Area, neighboring Kewaizaka open cuts, is situated in the valley called Umegayatsu on the east side of the hill extending from Genjiyama mountain with northwest direction. Latest excavation in this sight brought out the residential floor of the middle of the 13th to the latter half of the 14th century. Most of excavated relics are Kawarake dish, but we found also Chinese old coins, a small bowl of Seto ware and wooden product such as building materials, chopsticks, clogs, lacquer ware, Katashiro and Mokugū for pray and curse.

3. Site of Wakamiyaōji Area

Site of Wakamiyaōji Area occupies most of the center of Kamakura city and the site of the latest excavation in 1998 is situated on the west side of Komachi Street. There we found lots of wooden structural materials of ditches and buildings with pillars directly in the ground (Hottatebashira tatemono), and other wooden product such as lacquer ware bowl and dish with splendor design (see the picture of the cover). These structures and relics indicate that this site is the residential area for Bushi and the rich of Kamakura Period.

4. Site of Sugimotoji Temple Area

Site of Sugimotoji Temple Area is situated on the south side of Mutsuramichi Street, running through Tsurugaoka Hachimangū Shrine to Asahina Kiridōshi open cuts. The excavation in 1990 revealed the large structures of house for Bushi of the first half of Kamakura Period. Latest excavation in this sight in 1999 brought out the residential floor of the latter half of Kamakura to early Nanbokuchō Period and large quantities of Kawarake dish. And we also found the road of the middle of the 13th century as paving the road with rock from north to south.

5. Site of Mandokoro

Site of Mandokoro, government of Kamakura Bakufu, is situated on the east side of Tsurugaoka Hachimangū Shrine. The 7th excavation in this sight revealed lanes and ditches of the middle of the 13th to the first half of the 14th century. We found fences in the east side of the ditch, and well and pits in the east side of the fence. This indicates that the fence is the border of the west side of Mandokoro. Excavated relics include black flax, and this is the first excavated one of Kamakura Period in Japan.

6. Site of Tōshōji Temple

Site of Tōshōji Temple is situated in the valley called Kasaigayatsu on the east side of Hōkaiji Temple. Tōshōji Temple was founded by Hōjō Yasutoki and became one of a second ten biggest temples in Kantō area. It is well known that Hōjō Takatoki, the political leader of Kamakura Bakufu, killed himself there in 1333 when Kamakura Bakufu fell. The 5th excavation in this site brought out two residential floors of Middle Ages. One is of the middle of the 14th century and has a line of post-holes. Another is of the end of 13th to the first half of the 14th century and has two lines of cornerstone. Excavated relics include superior ones like as a white porcelain bowl with the design of ume blossom, wave, moon and peony, a celadon bowl with the design of two fish and brown glazed pot.

杉本寺周辺遺跡１次調査で出土したさまざまな遺物

常滑の出土状況
Tokoname pot

銅鏡とかわらけの出土状況
bronze mirror and bisuit ware small dish

井戸の底でみつかった曲物
bent wood box in well

軒丸瓦の出土状況
round eave tile

本書掲載の調査地点

《掲載遺跡名称及び所在地一覧》

1．長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目１２６２番２外）
2．海蔵寺旧境内遺跡（扇が谷四丁目６３２番２外）
3．若宮大路周辺遺跡群（雪ノ下一丁目１９８番６の一部）
4．杉本寺周辺遺跡（二階堂字杉本９１２番１外）
5．政所跡（雪ノ下三丁目９８９番４）
6．東勝寺跡（小町三丁目５２３番１４）

鎌倉の埋蔵文化財4

発　行　日　　平成13年3月31日
編集・発行　　鎌倉市教育委員会
印　　刷　　グランド印刷株式会社